広島大学図書館蔵「いろは韻」２種の掲載漢字と和訓について

―聚分韻略・落葉集との比較を含めて―

白　井　　純・中　尾　祥　子

【キーワード】韻書、韻目、いろは韻、和訓、いろは引き辞書

1．本稿の要旨

本稿は、江戸時代前期の「いろは韻」系辞書である『増補以呂波雑韻』寛文４（1664）年刊と、『廣益以呂波雑韻刊誤』寛文10年（1670）年刊の「以」部全用例を比較し、掲載漢字と和訓の増補内容を明らかにした。

早い段階に刊行された「いろは韻」には出典とされる『聚分韻略』の影響が強いとされる。しかし、本稿で『聚分韻略』慶長17（1612）年刊本と比較したところ、『増補以呂波雑韻』・『廣益以呂波雑韻刊誤』はともに『聚分韻略』掲載漢字・和訓の範囲ではよく一致するものの増補部分が多く、特に遅れて成立した『廣益以呂波雑韻刊誤』では『増補以呂波雑韻』にみられた増補を更に進め、同訓異字を中心に増補する傾向が顕著であることが明らかになった。

「いろは韻」の主な使用目的は和語（和訓）を手がかりとして漢詩の創作に必要な韻目を知ることだが、語の意味を反映した和訓に基づき、字義が同一または類似していて必要性を満たす韻目をもつ漢字を選び出すためには同訓異字が豊富であることが有利である。多い例では数十字に及ぶ同訓異字を掲載する『廣益以呂波雑韻刊誤』の増補内容は、そうした需要を満たすものだったと考えられる。

本稿では同じく和訓いろは引きのキリシタン版『落葉集』の一部「色葉字集」との比較も行った。『落葉集』の漢字の左右傍訓は定訓としてその漢字に最もよく結びつく和訓を示し、その他の字下注訓と明確に差別化されている。これらを「いろは韻」の和訓と比較すると、定訓はよく一致するものの字下注訓では一致の度合いが低くなる。相対的にみて定訓が当代の安定した和訓であることは明らかだが、字下注訓の由来については今後の検討が必要である。

２．先行研究と本稿の立場

岡島・佐藤・米谷・鈴木（2015）および鈴木（2016）は「いろは韻」の「以」部冒頭の文字によって諸本系統を「雷本（いかづち）」「乾本（いぬい）」「潼本（いやし）」に分類した（表１）[1]。

表１　「いろは韻」の諸本系統と特徴

	1590 1842	
	11　1634 16　1639 1669 1670	
	1656 1664	

佐藤（1963）は諸本を紹介しつつ「潼本」の『増補以呂波雑韻』を取り上げ、『古本節用集』・『下学集』・『倭玉篇』と比較し、『古本節用集』との間では345和訓のうち221和訓が共通するとした。山田（1973）は「雷本」古写本と『和玉篇』『新韻集』との関連に言及し、木村（2002）は「乾本」の『寛永16年版本』の掲出漢字が『聚分韻略』に一致するとしている。米谷（1997）は『増補以呂波雑韻』（本稿で取り上げた本）が『新刊節用集大全』に与えた影響を指摘している。

鈴木（2016）はそれぞれの系統のなかで早い時期の刊本を選び、「雷本」から『川越市立図書館蔵本』、「乾本」から『寛永11年版本』、「潼本」から『増補伊路波三重韻』を取り上げ、「ヨ」「ノ」部の全用例を比較している。結果として、掲載漢字は殆ど『聚分韻略』の範囲に収まり、特に『伊路波三重韻』にその傾向が強いという。和訓についても３本すべて９割前後一致するといい、「いろは韻」の成立に『聚分韻略』が深く関わったことが明らかになっている。

本稿では以上を踏まえ、「乾本」として『廣益以呂波雑韻刊誤』寛文10年（1670）年刊（広島大学図書館蔵　大国1419）、「潼本」として『増補以呂波雑韻』寛文４（1664）年刊（広島大学図書館蔵　大国1129）[2]を選んだ。これらは鈴木（2016）の取り上げた「いろは韻」の刊行から遅れており、後発の辞書としての増補の様子が観察できる。そこでサンプル調査として、『廣益以呂波雑韻刊誤』の「以」部全体の1259和訓を対象とする調査を行った。

３．内容の紹介と注記の検討

「いろは韻」の紹介は前節のように鈴木（2016）に詳しいので、ここでは概要を簡単に説明した後、本稿で取り上げた「いろは韻」の特徴を紹介する。

岡島・佐藤・米谷・鈴木（2014）の分類によれば、『増補以呂波雑韻』（図１）は「以」部冒頭が潼から開始する「潼本」、『廣益以呂波雑韻刊誤』（図２）は「乾」から開始する「乾本」である。どちらもいろは引きの韻書であり、漢詩を作るために和訓（和語）から字音を知り、必要な

図１　増補以呂波雑韻

図２　廣益以呂波雑韻刊誤

韻目に合致する漢字を探り当てるための辞書という基本的性格は同じである。

掲載漢字は和訓によるいろは分類で、内部で更に意義分類を行う。１つの漢字に対して複数の和訓がある場合は、それぞれの部に配属するので、全体としては同じ漢字が何度も掲載される。

どちらも上部に平、下部に仄を配置するが、『増補以呂波雑韻』は上部３段下部４段のマス目に漢字を配置するのに対し、『廣益以呂波雑韻刊誤』はおおむね上部３字下部３字であり、異体字掲出が多いためマス目を設けず１行あたり３～４字となる。どちらも仄字が多いため「以」部末尾付近では上段にも仄字を配置して余白を少なくするが、１行アケ、および上下段を分ける罫線を二重線から一重線に変えることによって平字との区別がなされている。

掲載漢字の右側に音読み、左上に韻目を表示する点も共通するが、『以呂波雑韻』の和訓が漢字の字下にあるのに対し、『廣益以呂波雑韻刊誤』では和訓が左側にあるため、韻目がその上にやや窮屈な配置となる。仮名遣いには混乱が多く濁音表記の有無も統一されない。また、肝心の韻目にも不正確な点がある。どちらも義注は字下にある。

『増補以呂波雑韻』の掲載情報は１つのマス目で完結する形式であるため、同一和訓であって

も一々注記することが多い（図３）のに対し、『廣益以呂波雑韻刊誤』は「同」注記により同一和訓の再掲出をしないことが多い（図４）。和訓「いはほ」[3]を例に挙げると、『増補以呂波雑韻』（１ウ上段）では「磐」が１行目、「嶌巖嵒岩」が３～４行目にあって別訓の漢字がその間にあるが、すべて「イハホ」が字下に示されているので関係は単純である。『廣益以呂波雑韻刊誤』（１オ上段）では和訓「イワヲ」に関連して「巖忤礹碞嵒嵒磐岩嶌」を掲載する。まず、先頭の「巖」に続く「忤礹碞嵒嵒」には「竝同上」の注があって和訓や韻目の表示は無いが、これらは異体字注として直上の「忤礹碞嵒嵒」が異体関係にあり、醜況譚！訓ゆで４厉攔舛翆斜蝡圭瓜槁傲儀槁３瓣巹ä祐

４．掲載漢字の増補

4.1 「いろは韻」の掲載漢字

『増補以呂波雑韻』に対し、後から刊行された『廣益以呂波雑韻刊誤』では掲載漢字が大幅に増補され、それに応じて掲載和訓も増加している。「以」部について、『増補以呂波雑韻』は762字、『廣益以呂波雑韻刊誤』は1259字（共に繰り返し掲載の漢字を含む）で1.65倍に達し、異なり和訓数では263種に及んでいる。『増補以呂波雑韻』にあって『廣益以呂波雑韻刊誤』にない漢字は次に示す12字のみ（表２）であり、直接の影響関係は検討の必要があるとしても全体的傾向では『増補以呂波雑韻』の内容をふまえた増補とみてよい。

表２　『増補以呂波雑韻』にあり『廣益以呂波雑韻刊誤』にない漢字

※	※	※	※	※	※	※	※	※	※
嫫	※	※	※ ※	※	※	※	※	※ ※	※
※	※	※	※ ※	※	※	※	※	※ ※	※
※	※	※	※ ※	※	痗	※	※	※ ※	※
※	※	※	※ ※	※	※	※	※	※ ※	※
※	※	※	※ ※	※	※	※	※	※ ※	※
※	※	※	※ ※	※	※	※	※	※ ※	※

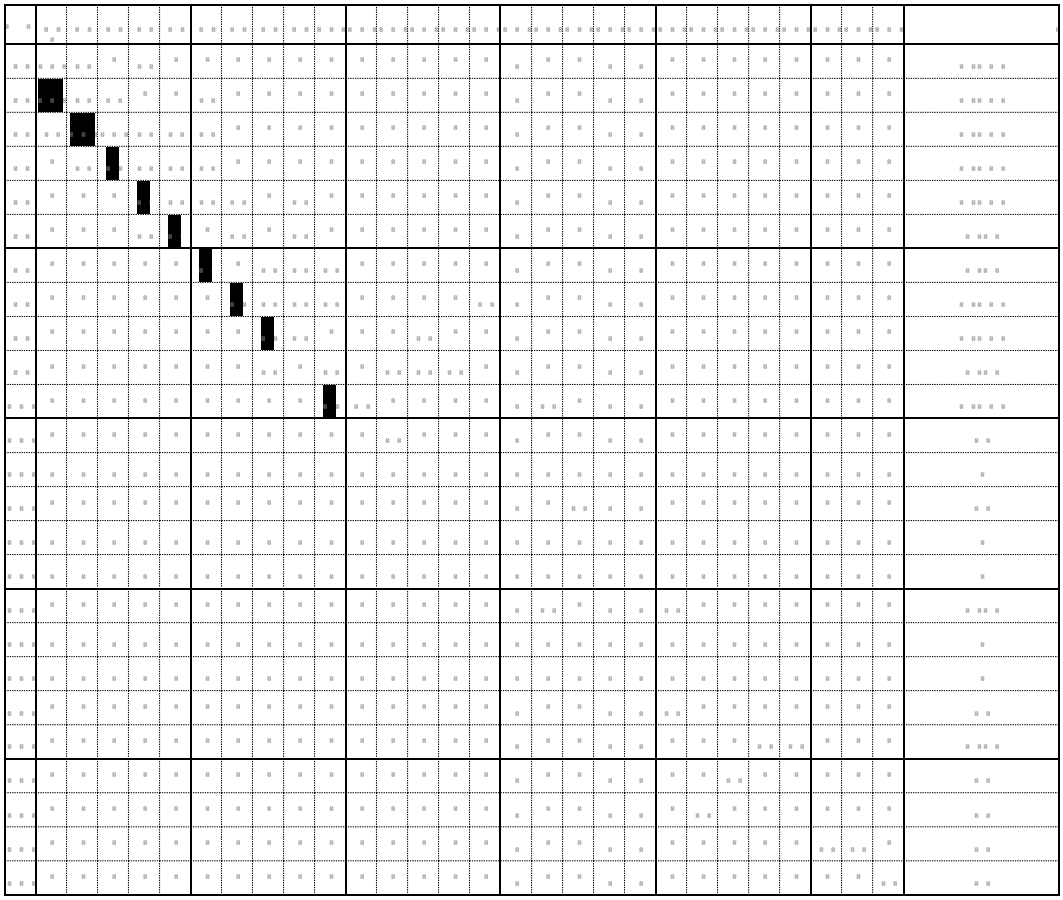
増補された漢字には異体字も含まれるが、新たに別字として追加された漢字が多い。例えば『廣益以呂波雑韻刊誤』の和訓「いかづち」は「雷雹霑畺畺抵抵窿霆霹靆窿霆靂按雪」だが、そのうち「雷窿霆靆窿霆按雪」は『増補以呂波雑韻』にも掲載がある。「雹霑」は異体字としての掲載なので、「畺畺抵抵霹靂」が別字としての追加漢字ということになる。また、和訓「いかるが」をもつ「鳩」や「いくさまつり」の「類禡」は『増補以呂波雑韻』の「以」部に和訓が無く、従って漢字の掲載も無い。

韻書としての利用形態をふまえるなら、同訓異字（同一和訓を持つ漢字）の増補は和訓に基づいて目当ての韻目をもつ漢字を探索するのに有利であり、『廣益以呂波雑韻刊誤』の増補はその点を特に重視している。例えば和訓「いかる」では『増補以呂波雑韻』の34字から『廣益以呂波雑韻刊誤』の47字、「いたむ」では33字から45字、「いのこ」では10字から25字、「いへ」では19字から37字など、同訓異字が大量に増補されている。

以下に示す表の縦軸は『増補以呂波雑韻』での和訓別の同訓異字の数（異体字は除く）によって分類し、横軸はそれらについて『廣益以呂波雑韻刊誤』で異体字を除外した同訓異字がいくつあったのかを示している（表３）。

表の最上段の縦軸が「０」の行は、『増補以呂波雑韻』に掲載が無く、『廣益以呂波雑韻刊誤』

表３　『増補以呂波雑韻』（縦軸）から『廣益以呂波雑韻刊誤』（横軸）への増補



で当該和訓が初めて現れた「鳩（いかるが）」「類禡（いくさまつり）」「制刳刹剃（いなぶる）」のような例である。これに該当する和訓は少なく、増補分（新規追加分）は１和訓あたり平均1.17字に過ぎず同訓異字も少ない。辞書の使用目的からすれば、珍しい和訓で漢字表記の結びつきが弱いものを掲載する理由に乏しいということだろう。

表の２段目は『増補以呂波雑韻』に当該和訓を持つ漢字が１例のみの例で、111例のうち99例は『廣益以呂波雑韻刊誤』で増補されない（表中の反転表示部分は増補がなかった漢字を意味する）。９例は２字の同訓異字、２例が３字の同訓異字、１例が６字の同訓異字を掲載する（「魅（いへのかみ）」が「魅彖魄魅魃魑魍」に増補されたのが最大）。増補分は１和訓あたり平均0.16字（１和訓あたり1.16字の掲載）に過ぎず同訓異字の増補にはやはり消極的である。

表の３段目以下は『増補以呂波雑韻』で同訓異字がみられた例で、３段目では『増補以呂波雑韻』で和訓に対して２字の同訓異字を掲載したのが49例あり、そのうち２例は掲載が１字に減り

（１字は異体字注記が新たに付いたので集計から外した）、28例が増補なし、11例が１字増補、４例が２字増補、３例が３字増補、１例が４字増補であることを意味する。２段目に比べて増補がやや多いことが確認できる。

以下、『増補以呂波雑韻』での同訓異字が多いものになるが、全体的傾向として増補は表の上部で少なく下部で多い。このことは『増補以呂波雑韻』での同訓異字の掲載が多い和訓ほど『廣益以呂波雑韻刊誤』での増補も多いことを意味している。もともと同訓異字を多く持つのは常用性の高い和訓であることが多く増補しやすかったとみられるが、これにより同訓異字のなかから必要な韻目を持つ漢字を探すという辞書の特徴がより強化されている。

4.2 「いろは韻」掲載和訓の比較

『増補以呂波雑韻』と『廣益以呂波雑韻刊誤』に共通して掲載される漢字について、『増補以呂波雑韻』「以」部の和訓が『廣益以呂波雑韻刊誤』「以」部に全く掲載されないのは延べ13字で、共通する749字の1.7%である（表４）。

表４　『増補以呂波雑韻』掲載漢字の和訓が『廣益以呂波雑韻刊誤』に全く一致しない例

[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]

澁。[illegible]

掲載漢字の一致とあわせ、同じ「いろは韻」辞書として影響関係は明らかだが、なぜこれらの和訓が一致しなかったのか詳細は不明である[4]。

共通して掲載する漢字について、『増補以呂波雑韻』に掲載が無く『廣益以呂波雑韻刊誤』に掲載がある和訓は多く、１字１訓だったものが１字多訓になり検字しやすくなっている。その一方、『増補以呂波雑韻』で多訓字だったものは、『廣益以呂波雑韻刊誤』で和訓の一部を失うことがある。

『増補以呂波雑韻』と『廣益以呂波雑韻刊誤』で掲載漢字と和訓１つを共有するもののうち、『廣益以呂波雑韻刊誤』で和訓を増補したのが30例ある（表５）。

表５　漢字と和訓１つ以上を共有するうち『廣益以呂波雑韻刊誤』で和訓を増補した例

	𠀋	𠀋
箙𠀋	𠀋	𠀋
𠀋	𠀋	𠀋
𠀋	𠀋	𠀋
𠀋	𠀋	𠀋
𠀋	𠀋	𠀋
𠀋	𠀋	𠀋
𠀋	𠀋	𠀋
𠀋	𠀋	𠀋
𠀋	𠀋	𠀋
𠀋	𠀋	𠀋
𠀋	𠀋	𠀋
𠀋	𠀋	𠀋
𠀋	𠀋	𠀋
𠀋	𠀋	𠀋
𠀋	𠀋	𠀋
𠀋	𠀋	𠀋
𠀋	𠀋	𠀋
𠀋	𠀋	𠀋
𠀋	𠀋	𠀋
𠀋	𠀋	𠀋
𠀋	𠀋	𠀋
𠀋	𠀋	𠀋
𠀋	𠀋	𠀋
𠀋	𠀋	𠀋
𠀋	𠀋	𠀋
𠀋	𠀋	𠀋
𠀋	𠀋	𠀋
𠀋	𠀋	𠀋
𠀋	𠀋	𠀋
𠀋	𠀋	𠀋
𠀋	𠀋	𠀋
𠀋	𠀋	𠀋

これらは単純な和訓の増補で、※印は同一箇所での複数和訓掲載を示す。疑問訓の「戌（イへ)」が誤植とすれば29例であり、語頭「い」の和訓をもつ漢字に限るが、多訓字を増やすことにはあまり積極的ではない。同様の条件で逆に多訓字が減少したのが43例あり、むしろ１つの漢字に対する和訓を絞り込んでいる（表６）。

表６　漢字と和訓１つを共有するうち『廣益以呂波雑韻刊誤』で和訓が減少した例

[illegible]	[illegible]	[illegible]
[illegible]	[illegible]	[illegible]
[illegible]	[illegible]	[illegible]
[illegible]	[illegible]	[illegible]
[illegible]	[illegible]	[illegible]
[illegible]	[illegible]	[illegible]
[illegible]	[illegible]	[illegible]
[illegible]	[illegible]	[illegible]
[illegible]	[illegible]	[illegible]
[illegible]	[illegible]	[illegible]
[illegible]	[illegible]	[illegible]
[illegible]	[illegible]	[illegible]
[illegible]	[illegible]	[illegible]
[illegible]	[illegible]	[illegible]
[illegible]	[illegible]	[illegible]
[illegible]	[illegible]	[illegible]
[illegible]	[illegible]	[illegible]
[illegible]	[illegible]	[illegible]
[illegible]	[illegible]	[illegible]
[illegible]	[illegible]	[illegible]
[illegible]	[illegible]	[illegible]
[illegible]	[illegible]	[illegible]
[illegible]	[illegible]	[illegible]
[illegible]	[illegible]	[illegible]
[illegible]	[illegible]	[illegible]
[illegible]	[illegible]	[illegible]
[illegible]	[illegible]	[illegible]
[illegible]	[illegible]	[illegible]
[illegible]	[illegible]	[illegible]
[illegible]	[illegible]	[illegible]
[illegible]	[illegible]	[illegible]

※	※	※
※	※	※
※	※	※
※	※	※
※	※	※
※	※	※
※	※	※
※	※	※
※	※	※
※	※	※
※	※	※
※	※	※
※	※	※

『増補以呂波雑韻』が必要に応じて一つの漢字に複数の和訓を列挙する（「以」部なら語頭「い」の和訓に限る）のに対して『廣益以呂波雑韻刊誤』は原則として左傍に１つの和訓しか無いため絞り込まれたのだろう。但し、それがどのような基準に基づくのかは明らかでない。

この他に増減のあったものとして、

→

→

の２例がある。「祝（イヲウ）」は疑問訓かもしれない。

５．他の辞書との比較

5.1　韻書と和訓の辞書

ここで、「いろは韻」の典拠となった『聚分韻略』（慶長17（1612）年刊）[5]と、キリシタン版『落葉集』のいろは引き「色葉字集」（慶長３（1598）年刊）を「いろは韻」と比較する。『聚分韻略』は部首引きであって検字方法が全く異なるが、掲載漢字の一致から「いろは韻」の典拠として知られている。「色葉字集」は和訓いろは引きであり、韻書ではないがそれぞれの漢字に対する有力な和訓（定訓）から検字できる設計であり、中世末期の日本語の実態を反映するとみられている。

5.2　『聚分韻略』

『聚分韻略』で語頭「い」の和訓をもつ漢字は延べ261字で、『増補以呂波雑韻』延べ762字、『廣益以呂波雑韻刊誤』延べ1259字に比べて格段に少ない。『聚分韻略』は『廣益以呂波雑韻刊

誤』に対して21%に過ぎないのだから、単なる増補ではなく、韻別の韻書から和訓引きの韻書へと基本的性格が変わったと考えた方がよい（表７）。

表で「他」としたのは「いたる」以外の和訓である。『聚分韻略』から『増補以呂波雑韻』へ、そして『廣益以呂波雑韻刊誤』へと語頭「い」の和訓に対応する掲載漢字が大きく増補されている[6]。これにより、韻目選択の幅も広がっている（表８）。

しかし、『聚分韻略』261字のうち20字は『廣益以呂波雑韻刊誤』に掲載がない。字体が似ており和訓が一致する「磧（イサコ）」が「碃」、「擽（イツワル）」が「贗」だとすれば不一致は18例である（表９）。

表９　『聚分韻略』にあり『廣益以呂波雑韻刊誤』の「以」部にない漢字

和訓「いたる」「いつはる」「いたむ」などは『廣益以呂波雑韻刊誤』で同訓異字を多く掲載する有力な和訓であり、「怙（イタム）」は『増補以呂波雑韻』にも掲載があるので、『廣益以呂波雑韻刊誤』がこれを掲載しない理由を考えた方がよい。

『聚分韻略』の和訓が『廣益以呂波雑韻刊誤』に掲載されないのは延べ25例である（表10）。

		—		
ɾ	ǫ T	ǫ j		
	ǫ ḱ Э	ǫ ḱ ы є Э		
	ǫ б є	ǫ б є		

25例のうち８例（備考欄※印）では『増補以呂波雑韻』と一致しており、表５に示したように『廣益以呂波雑韻刊誤』で当該和訓が無くなっている。『廣益以呂波雑韻刊誤』が『聚分韻略』を直接参照していない可能性を検討すべきである。

A　→　　A　B　→　　B

『廣益以呂波雑韻刊誤』で上記のような和訓の絞り込みがあったため不一致を生じたものである。

5.3 『落葉集』

『落葉集』のいろは引き「色葉字集」は和訓に対応する単漢字と熟字訓を併載する部分で、漢字の右側に定訓といわれる有力な和訓が現れる。この和訓はそれぞれの漢字に最もよく結びついた漢字を代表する和訓であり、漢字の字下に列挙される字下注訓とは明確に差別化されている。従って、この和訓は中世から近世にかけての有力和訓であり、「いろは韻」にも掲載があると期待される。

「色葉字集」で語頭「い」の定訓をもつ120字のうち113字が『廣益以呂波雑韻刊誤』に掲載があり、１字は誤植で不一致が実質６字なのはこのことを反映すると考えてよい（表11）。

表11　「色葉字集」で語頭「い」の定訓をもち『廣益以呂波雑韻刊誤』の「以」部にない漢字

『廣益以呂波雑韻刊誤』の「以」部は延べ1259字の漢字を掲載しており、「色葉字集」と比較して文字通り桁違いであるから、一致する漢字が多いこと自体はむしろ当然である。

字下注訓に「い」から始まる和訓をもつ78字では『廣益以呂波雑韻刊誤』に掲載があるのは56字に留まり、育（いとけなし）、西（いる）などの22字は掲載がない（表12）。

表12　「色葉字集」で語頭「い」の字下注訓があり『廣益以呂波雑韻刊誤』の「以」部にない漢字

𠀋	𠀋	𠀋	𠀋
𠀋	𠀋 𠀋	𠀋	𠀋
𠀋	𠀋 𠀋	𠀋	𠀋
𠀋	𠀋 𠀋	𠀋	𠀋
𠀋	𠀋 𠀋	𠀋	𠀋
𠀋	𠀋 𠀋	𠀋	𠀋
𠀋	𠀋 𠀋	𠀋	𠀋
𠀋	𠀋 𠀋	𠀋	𠀋
𠀋	𠀋 𠀋	𠀋	𠀋
𠀋	𠀋 𠀋	𠀋	𠀋
𠀋	𠀋 𠀋	𠀋	𠀋
𠀋	𠀋 𠀋	𠀋	𠀋
𠀋	𠀋 𠀋	𠀋	𠀋
𠀋	𠀋 𠀋	𠀋	𠀋
𠀋	𠀋 𠀋	𠀋	𠀋
𠀋	𠀋 𠀋	𠀋	𠀋
𠀋	𠀋 𠀋	𠀋	𠀋
𠀋	𠀋 𠀋	𠀋	𠀋
𠀋	𠀋 𠀋	𠀋	𠀋
𠀋	𠀋 𠀋	𠀋	𠀋
𠀋	𠀋 𠀋	𠀋	𠀋
𠀋	𠀋 𠀋	𠀋	𠀋
𠀋	𠀋 𠀋	𠀋	𠀋

掲載されない漢字が相対的に多いのはこれらの和訓と漢字の結びつきが弱いためだと考えられるが、それを実証するためには双方の辞書での和訓の掲載方針を明らかにする必要があり、現時点ではその準備がない。

６．まとめ

本稿の結論は次のとおりである。

１．語頭「い」の和訓をもつ漢字の掲載は、『聚分韻略』延べ261字、『増補以呂波雑韻』延べ762字、『廣益以呂波雑韻刊誤』延べ1259字である。
２．直接の影響関係は不明だが、掲載漢字と和訓については『増補以呂波雑韻』が『聚分韻略』を、『廣益以呂波雑韻刊誤』が『増補以呂波雑韻』をおおむね取り込んだ状態であり、そのうえで掲載漢字の大幅な増補を行っている。
３．増補の傾向として、多訓字（１漢字に対して多数の和訓）を増やすよりも同訓異字（１和訓に対して多数の漢字）を増やす方向での増補が顕著である。
４．豊富な同訓異字は和訓から目当ての韻目を持つ漢字を探索するのに都合が良く、掲載漢字の増補はこのような使用目的をふまえたものである。

語の意味を反映した和訓に基づき、字義が同一または類似していて必要性を満たす韻目をもつ漢字を選び出すためには同訓異字が豊富であることが有利である。多い例では数十字に及ぶ同訓異字を掲載する『廣益以呂波雑韻刊誤』の増補内容は、そうした需要を満たすものだったと考えられる。和訓で引くという性格上、利用者の漢字音に対する知識はあまり必要ない。掲載される漢字の難解さに比べ、結びつけられる和訓は常用性の高いものなので、当初から目的の漢字を念頭に置いた検字ではなく、常用性の高い和訓から同義字・類義字のリストを求め、そこから目的の韻目をもつ漢字を探り当てるための簡便な手引きとして、近世期にはこうした韻書の需要が大きかったのだろう。

鈴木（2016）によれば、「いろは韻」は初期の刊本はおおむね『聚分韻略』の掲載漢字・和訓の範囲内にあるというが、『増補以呂波雑韻』は掲載漢字が大幅に増加し、『廣益以呂波雑韻刊誤』は更にそれを進めて和訓で引く韻書としての個性を強めている。この転換点がどこにあったのか、そして大量の同訓異字をもたらした典拠は何なのか、「いろは韻」諸本および中世末期から近世初期にかけての古辞書の比較検討が必要である。

参考文献

岡島昭浩・佐藤貴裕・米谷隆史・鈴木功眞（2015）「イロハ韻の展開（日本語学会2014年度秋季大会研究発表会発表要旨）」『日本語の研究』11-2、p.195
奥村三雄『聚分韻略の研究　付古本四種影印慶長版総索引』風間書房（1973）
木村晟『中世辞書の基礎的研究』汲古書院（2002）

佐藤茂（1963）「『いろは韻』考序説」『国語国文学』11号、pp.1-12
佐藤茂（1977）「『いろは韻』について（承前）」『国語国文学』20号、pp.56-71
鈴木功眞（2016）「近世初期イロハ韻諸本の和訓試論 ―『聚分韻略』『新韻集』との対照を中心に―」『訓点語と訓点資料』137輯、pp.52-66
山田忠雄（1973）「伊呂波韻の古写本」（『長沢先生古稀記念図書学論集』三省堂、pp.425-478）
米谷隆史（1997）「新刊節用集大全の編纂資料をめぐって」『国語学』188集、pp.15-28

付記

本研究は2020年度広島大学大学院演習における中尾祥子のレポートを元とし、授業担当教員の白井純が本人の了承のうえで大幅な増補を行ったものです。

画像の引用にあたって、広島大学図書館が協力し、国文学研究資料館が公開している電子画像を利用しました。

本研究は JSPS 科研費18K00608の助成を受けたものです。

註

1 鈴木（2016）の情報に基づき再構成した。

2 この２本はいずれも京都ふ屋仁兵衛刊である。国文学研究資料館のサイトで画像公開されている。http://base1.nijl.ac.jp/~tkoten/owners/syuusyuu_list/list_hiroshimadaito.html

3 「いろは韻」和訓の平仮名表記は、仮名遣いの違いや濁音表記の有無を統合した代表形である。

4 「廓」では「イカリカホ」を同訓異字が多い和訓「いかる」に結びつけているが、孤立する和訓を避け、同訓異字として整理することで検字に配慮したのかもしれない。同様の例に「櫨」の「いぬくさし」→「いぬ」がある。

5 ここでは、奥村（1973）の複製本に掲載のある慶長17（1612）年刊本（京都大学附属図書館蔵）を取り上げた。

6 『廣益以呂波雑韻刊誤』は『増補以呂波雑韻』に比べて異体字の掲載が格段に多く「以」部では209字に及んでいる。韻目は正字と同じなので必要な韻目をもつ漢字を探すという辞書の使用目的からすれば有効な増補ではないと思われる。こうした増補が行われた意図も検討すべきだろう。

kanji *wakun*

Jun SHIRAI, Sachiko NAKAO

This study compares all instances of the usage of the *i* 以 groupings in the early Edo period *Iroha* Rhyme dictionaries *Zōho iroha zatsuin*[1] (Extended iroha rhyming dictionary, 1664) and the *Kōeki iroha zatsuin kango*[2]
contents' Chinese characters (*kanji*) and their Japanese pronunciations (*wakun*). Although the early publication of *iroha* *Shūbun inryaku*[3] (Rime outline, classified and explained), in this study, the *Zōho iroha zatsuin* and the *Kōeki iroha zatsuin kango* are compared against the 1612 edition of the *Shūbun inryaku*. In particular, the later established *Kōeki iroha zatsuin kango* has further expanded on the additions made in the *Zōho iroha zatsuin*, and a clear tendency can be observed in which different characters with the same Japanese pronunciation were added.

Iroha rhymes are used to determine rhyme schemes needed to create Chinese poetry using Japanese words (*wakun*) as a guide. Based on *wakun*
number of *kanji* with the same *wakun* pronunciation to select *kanji* with the same or similar meanings and a suitable rhyme scheme. The additional content in the *Kōeki iroha zatsuin kango*, which in many cases contains tens of characters with the same *wakun*, is thought to have been designed to meet this need.

This study also makes a comparison with the "*Iroha jishū*[4]," which is also based on *wakun iroha* and is contained in the *Rakuyōshū*[5], the dictionary of the Jesuit Mission Press in Japan. The left and right marginal notes for each *kanji* in the *Rakuyōshū* indicate the Japanese pronunciation most commonly associated with that *kanji* as a *teikun*[6] (fixed pronunciation) and are clearly differentiated from other pronunciations mentioned under the character notes. While the *teikun* is consistent with the *wakun* in the *Iroha* Rhyme, the degree of consistency is lower with those pronunciations mentioned in the notes. Relatively speaking, it is clear that the *teikun* is the most stable *wakun* of its time, but the origin of the pronunciation in the character notes needs further investigation.

---

[1] 増補以呂波雑韻

[2] 廣益以呂波雑韻刊誤

[3] 聚分韻略

[4] 色葉字集

[5] 落葉集

[6] 定訓